# 新刊紹介

横山文樹著

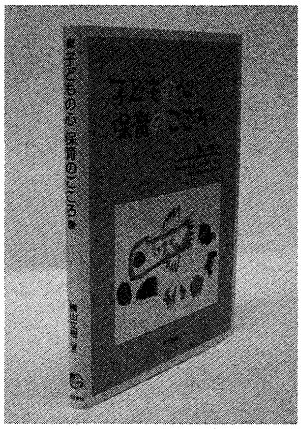
## 『子どもの心　保育のこころ』

秋田喜代美

保育の場や子どもを見ると、行動は目に見える。しかし、「こころ」は、直接見たり語ることはできない。具体的な状況を通して、場面を通して、こころに近づくことになる。しかしこころは見ようとしても見えるものではない。保育者の専門性としての教育的鑑識眼をもって、保育の場や子どもを見るから見えてくるのである。

本著は、男性保育者としての経験を長年豊かにもち、また幼児教育の研究者であり、そして保育者養成課程で教鞭をとってこられた横山氏だからこそ、子どもの心、そして子どもたちを育てていく保育のこころがさまざまなアプローチと視座を通して語られる。そして本書を一貫して通底するのは、保育者の専門性への誇りと信頼、そしてその難しさという事実による専門性への問いである。

まず第1章では、「エピソードで綴る子どもの心」と題して、横山氏自身が日々の保育場面で、ご自分で経験されたり、立ち会われ聞かれた話が記録された数多くのエピソードによって、子どもの心が物語られる。そこには、横山氏がどのような場合にも子どものその時の気持ちを敬愛し、行動を共に面白がって感じ、それを興味深く読者に語りかけようとしている姿がある。子どもを子どもっぽいものとして扱うのではなく、子どもの心の豊かさと脆さ、そこにゆれうごく子どもの自己を捉えた言葉であふれている。子どもの言葉に耳を傾け、その背後にある子どもの気持ちを的確に捉えて読者に語りかける。このエピソードの中にはいくつも、家庭や保護者の姿が現れてくる。そこにこの本が家庭や若い保育者の卵や保育者に対話的に語りかけたいという思いが伝わってくる。また男性保育者らしいエピソードもあふれている。



2005年2月1日発行
同文書院
A5判　140頁
定価1600円（本体）

たとえば、エピソードとして「男の先生に向かって　B子ちゃん「先生、結婚しても辞めないでね」　先生「辞めないよ」　B子ちゃん「よかった」」といった話が紹介される。おそらくこのおもしろさは男性保育者の目線だからこそ、捉えられたのではないだろうか。また手品についてのエピソードもでてくるが、やはりそこに感じられるのも、こういうダイナミックな保育っていいなあという面白さである。本著は保育一般についての語りかけであると同時に男性保育者への応援歌にもなっているのである。

そして第2章「保育・保育者・子どもについて語る」では、第1章のエピソードで綴られたできごとが、よりまとまった形で主張として語られる。これは幼稚園の先生方や園の保護者の方向けの横山氏の講演会記録や研修、講義記録から採られたものである。現代の社会や家庭の変化に応じて、幼児教育において今何が求められているのか、また家庭は何をひきうけなければならないのかが、具体的事例を含めて語られる。横山氏の語りには常に具体的なエピソードが伴う。だからどのように動いたらよいのかが伝わるのである。そこには保育者としての経験知としてどのようにしたら具体的に実現できるかを常に考える志向性がある。だから一般原則でもお説教でもなく、なるほどと

うなずきながら世界に入っていくことができる章だてとなっている。またとても興味深いのは、横山氏自身の若い頃の家庭訪問のエピソードなどがコラムに埋め込まれている点である。こんなこともあるだろうと、ほんわかとしたユーモアをもって保育者の仕事をみることができる。

そして第3章「写真で綴る子どもの心」では、横山氏の保育者としての、このあたたかなまなざしが発揮される。保育の中で子どもが考えたり、遊びに入り込んでいる姿が写真を通して紹介される。保育の場の写真では、ある一瞬が意味をもっている。後追いになってはその一瞬をカメラで収めることはできない。子どもの行動への見通しをもっていること、子どもの面白さが何かがわかるから、シャッターチャンスを逃さない写真がそこに現れる。そしてこれらの写真の特徴は、ある子どもを被写体にしているのではなく、子どもと場、子どもと子ども、子どもと保育者の関わりが見える写真である点である。だからこそ、一枚の写真からその前後にどのようなことが起こったのだろうかと写真を見る人の推測を可能にするのである。そしてこの物語を捉えるまなざしこそが、保育者が子どもをとらえ、保育を見る時の専門的見方なのだと感じさせられる。保育においては非言語的な身ごなしがとても重要な意味をもっている。そして横山氏自身が文章でも語っておられるように、その保育者の身体と子どものまなざしや身ごなしが本章の写真の中にあらわれている。意味ある写真は写真自身が多くを語る。だからこの章には多くの解説の言葉は付されない。しかしそこに子どもの暮らしや遊び、学びがうかびあがっている。

第1章から第3章までが、子どもの心を図とし保育の場面を地として、エピソード、メッセージ、写真と様々なアプローチで描出するのに対し、第4章、第5章では、保育者の仕事が図となって保育の世界が描き出される。第4章では、保育者としての自身の失敗談や実習生や若手保育者の声がとりあげられ述べられる。保育においては失敗から学ぶこと、困難から学ぶことが重要であること、様々な困難を経験しながら保育者自身もまた育ち熟達化していくことがこれらの章を通して伝わってくる。と同時に、これを保護者が読まれたら、保育がただ遊ばせているだけではないことがよくわかり、若手保育者がいかに保護者対応で苦労しているかもよく伝わるにちがいない。そして第5章では保育者の専門性について、現代の厳しい状況においても「子どもの視点に立った専門性の向上」というメッセージが、「丁寧に子どもに応えること」「固定的には見ないこと」「予想外の出来事への状況に応じた働きかけと、教材や素材の提示」そして「子どものすべてを受け入れること」といった形で事例から語られる。そして専門性向上のための園内研修の重要性が指摘されるのである。

保育者の専門性は、実践的な知識と技能、それらに基づく専門的判断と倫理感にあると私は考えている。本書はその専門的判断の内実と、保育者が保育者として生きる心としての倫理とは何かを、横山氏の人柄と経験に裏打ちされた形で、若手保育者の目線や子どもの目線に立って語りかけられた本と言えるだろう。保育を考える方たちに味わってもらいたい一冊である。

（あきた　きよみ　　東京大学大学院教育学研究科教授）